



「イネウシカ類の飛来を高精度に予測する研究を開始－緊急時環境放射能予測システム世界版 WSPEEDI の新たな利用－」について、茅野大気環境研究グループリーダーより資料 1-1 に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

SPEEDI は拡散モデルだが、渡り鳥は自分で飛んでくる、イネウシカは拡散モデルで対応できるのか。

(茅野グループリーダー) イネウシカは自分で飛ぶというよりはホバリングしているだけ、その間に風で運ばれる。

気象条件がわかれば、予測できると考えてよいか。

(茅野グループリーダー) 梅雨期の低層ジェットにより運ばれることは大体わかっている。イネウシカが運ばれてくるのは、梅雨期だけなのか。

(茅野グループリーダー) 中国で大量にイネウシカが発生する時期がちょうど梅雨期にあたる。

これは日本に運ばれる経路を調べる解析だが、最終的には発生源に対し対策をとるという考えはあるのか。

(茅野グループリーダー) 農水省農業研究センターと中国の間では、発生源での調査を同時に進めていると聞いている。直接、原研と中国はやりとりをしていない。

発生源を絶ていかなければ意味がないと思う。また、イネウシカは増えているのか。

(茅野グループリーダー) 同じくらいで推移しており、減っていない。

それであれば、発生源を絶つ意味はあると考える。絶ち方もいろいろ考えられると思う。農水省農業研究センターとの情報交換はやっているか。

(茅野グループリーダー) 発生源はどこか、どういう遺伝的特徴をもっているかなどから、いづれ対策は取れると考えている。

このような目的研究は、なにを狙って、どこまで成果が期待できるかをあらかじめ評価しておくことが大切であり、取りあえず行っているでは、委員会としても抵抗がある。今回の目的は何なのかをもう一度説明してほしい。

(茅野グループリーダー) まずは発生源を調べることで、そして飛来を予測することで農薬の投入量を減らすことである。発生源を絶つことまでは考えていない。

研究する場合、実際にここまでやりたいという願望、意欲を示して欲しかった。

「アクチノイド内包フラーレンの合成・分離精製」について、永目超アクチノイド元素核化学研究グループリーダーより資料 1-2 に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

ウランやアクチノイドの他の金属はどうなのか。

(永目グループリーダー) ランタンなどはよく入る。カリウムなどの一価の原子数を持つものは入らない。ウランなどのアクチノイドは、ランタンと似たような電子構造をもつので、入るかどうか興味はある。

1 ページ目の元素の選択的分離の可能性が、資料の最後には出てこないのはどういうことか。

(永目グループリーダー) ウランやネプチニウム、アメリシウムを取り込むことができれば、将来的に有望な技術となるが、今のところ、内包確率が低いので今後の課題と考えている。

この研究は、どの段階にあるのか。

(永目グループリーダー) 今は、黎明段階で、始まったばかりである。

「シングルイオンヒット技術を開発」について、西堂センター長より資料1-3に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

シングルイオンである理由はなにか。

(西堂センター長) 細胞1個体の特定の場所に当てることが目的であるため。

突然変異誘発制御とあるが、具体的に制御したものはあるか。

(西堂センター長) 現在は1000個の細胞の集合体を標的として均一な照射を行い、その中から2~3個突然変異が現れるという照射方法を取っているが、どこに当てると変異が現れるかがはっきりすれば、例えば、菊のここに当てると花びらが変わりますという具合になる。

今度は狙い打ちしてより効率的にしようしていると理解してよいか。

(西堂センター長) その通り。

目的はそれだけか。

(小林室長代理) イオンビームが細胞の突然変異を発生させることは掴んでいるが、そのメカニズムを正確に調査するということである。いわゆる、イオンビームの生物効果が高いのが何故かについて、細胞を薄くして、そこにビームを貫通させ、ビームがどこを通ればどのような損傷が発生するか、その結果突然変異がどのように発生するかを調べるということである。

(2) 第3回 JNC 原子力平和利用国際フォーラムー原子力平和利用技術と国際貢献ーについて

標記の件について、資料2に基づき岩永国際・核物質管理部長より説明があった後、青山参事官より、本件は原子力委員会への後援名義申請に関する説明であること及び後援名義を出すにあたっての要件を満足していることを紹介した後、以下のとおり質疑応答があった。

これに対して他に後援名義を出している団体はあるか。

(青山参事官) 経済産業省および文部科学省に申請しており、許可を得ている。

今年の新味はどこにあるのか。

(岩永部長) 核不拡散の観点でのアジアからの参画と国際的に見た透明性の問題である。日本が国際会議を開く場合に、特に先進国からの参加者に対して旅費つきで招待するのはどうかと思う。何回か開いていて名声ができてくれば、滞在費ぐらいいいだが、旅費までは必要ないと思う。

感覚が遅れている。広報のあり方は10年以上前から言っている。今更広報が大事というのはおかしい。一般公開になっているが、何名ぐらい来るのか。

(岩永部長) 前回の例では、230名くらいである。

少ない。一般の人が対象ということが一番大事だと思う。

核燃料サイクル開発機構に移行した時に、これから仕事を進めていく中でアピールする場としてフォーラムを位置づけた。敦賀、東京等で行われているが、それらの関係がわからない。数箇所似たようなものを行う必要はないと思う。また、核不拡散の問題も、サイクル機構と核物質管理センターが目的に応じて行うことを、原子力委員会で分類したはずである。その成果がどこに現れているのか。

政府の補助金を使うもので旅費等の考え方は整理されたものはあるか。

(青山参事官) 必要な方の旅費・滞在費は出す。ただし、先進国レベルでの会合であれば、滞在費のみの場合もある。

### (3) その他

平成13年度原子力関係予算総表の一部変更について、資料3に基づき青山参事官より説明があった。

以上